

「広い」世界と「狭い」世界
—ハワイ親子留学に参加した日本人母親の卓越化—

五十嵐 洋己

“Open-minded” and “Narrow-minded” Worldviews: Japanese Mothers’ Class
Distinction through *Oyako-ryūgaku* (Parent-child Study Abroad Tour) in Hawaii

Hiroki Igarashi

要旨

2000年代以降、東アジアの家族の越境化—父親を残し母親と子どもだけで英語圏の国や地域へ移住するという国境を越えた教育・家族戦略—の現象についての議論が行われている。本稿では日本の越境教育戦略の一例である、夏休みや春休みに実践される「親子留学」にハワイで参加した21名の日本人母親の語りに注目し、子どもの能力言説を用いてどのように「良い母親」像を構築し卓越化を行っているかを考察した。分析の結果、調査対象者は親子留学を通して、子どもが「グローバル型能力（英語力やコスモポリタンの視野・志向性）」と「ポスト近代型能力（個性・自己表現力）」を獲得するとして、子どもが「広い」世界で生きるという世界観を構築していた。一方で、調査対象者のうち低階層出身者は、「日本の高学歴エリート家族」を「近代型能力（高い学力）」しか持たない「狭い他者」と積極的に位置づけ卓越化を行っていた。結論では、このような能力言説を用いた卓越化の意味について考察を行った。

Abstract

Since the 2000s, scholars have discussed the transnationalizing of East Asian families—the mothers educate and nurture their children in English-speaking countries while the fathers remain in the home country. By interviewing 21 Japanese mothers participating in a short-term parent-child study tour (*oyako-ryūgaku*) in Hawaii, I observed how they engage in class distinction by identifying themselves as “good mothers” through employing culturally embedded discourses on children’s competencies. My findings reveal that these mothers constructed a worldview that their children are becoming ‘open-minded’ by acquiring individuality, self-expression capabilities, English language skills and cosmopolitan orientations which prepare them for more job opportunities in the future. Within the group, the less educated mothers compared to the well-educated ones, were more likely to distinguish themselves from domestic elite families in that they perceive the latter as ‘narrow-minded’ regarding their children’s personality and future job prospects. In conclusion, I discuss the ways in which my research participants employed various discourses on children’s competencies as related to class distinction.

1. 問題設定

近年、日本を含む東アジア諸国の富裕層の家族において、母子のみで英語圏の国や地域に渡り子どもを英語環境の中で育てる、教育・家族戦略が報告されている (Chee 2002, Finch and Kim 2012, Igarashi 2015, Igarashi and Yasumoto 2014, Lee and Koo 2006, Waters 2006)。これらの教育・家族戦略は、韓国では「渡り鳥家族」、中国では「宇宙飛行士家族」、そして日本では「親子留学」という名称で知られ、世界的に広がる高等教育の国際化と世界大学ランキング等で序列化され、その中で制度化されつつある「グローバル (コスモポリタン) 文化資本」 (Igarashi and Saito 2014, Iijima 2009, Kim 2012, Weenink 2008, Weiss 2005) を子どもに獲得させ、グローバルに構築される社会階層において階層再生産または上昇社会移動を目指したものと理解されている。この国境を超えて展開される教育戦略の事例は、既存の社会科学の研究において「社会」と「国民国家」と捉える「方法論的ナショナリズム」 (Beck and Sznaider 2006) を相対化し、グローバルな社会領域で展開される新しい社会生活の営みを理解する上で重要な意味を持つ。

東アジアにおける越境教育戦略の事例研究は 2000 年代から多く散見されているが、日本の事例についてはまだ少ない。特に、東アジア諸国と日本の事例を比較の視点から考察することで浮かび上がる「日本の特徴」そして「東アジアの特徴」を理解するために、日本の事例の研究の発展は待った無しの状態だ。Igarashi and Yasumoto (2014) は家族社会学の視点から、短期親子留学でハワイに滞在する日本人女性が、個人、母親、妻であることの願望や期待、規範を交渉しながら越境空間で複雑にアイデンティティの構築を行っていることを議論した。本稿では、教育社会学の視点より、様々な階層背景の日本人母親が親子留学に参加することを通してどのように「良い母親」であることの世界観を構築しているかに注目する。特に、母親がどのような能力言説を用いて自らの越境教育戦略の意味を生成し卓越化 (Bourdieu 1979=1990) を行っているかについて考察する。日本の教育社会学の領域では、親の最終学歴を社会階層の指標として利用するため (本田 2008, 吉川 2009 など)、本研究もそれに習い母親の最終学歴 (短大・四年生大学卒、専門学校卒、高校卒等) に依拠する。

2. 先行研究

グローバル化と新自由主義が進展する現在、世界経済や産業構造の急激な変化により求められる人材像と能力の変化が日本で議論されている。この新しい能力主義は岩木 (2004) によってポストモダン・メリトクラシー (脱近代型能力社会) と定義された。「勝ち組」は、グローバル・メリトクラシー (国際能力主義社会) に吸収され、「負け組」である一般大衆は表層的な個性にとらわれて相互を評価するイデオシンクラシー (個性浪費社会) に取り込まれる (岩木 2004)。このような情報化と消費化を中心としたポスト近代化社会では、「近代型能力」として理解される基礎学力、知識量、順応性、同質性よりも、文部科学省が 1996 年の中教審第一次答申で掲げた「生きる力」に代表されるような、コミュニケーション能力、創造性、個性、能動性を含む多様かつ多面的な能力である「ポスト近代型能力」が要求され

る(本田 2005)。「ポスト近代型能力」の獲得は、『個々人の生来の資質か、あるいは成長する過程における日常的・持続的な環境要件によって決まる部分が多いであろう』(本田 2005:23)と議論されている。また、この新しい能力の獲得方法は、国家の教育制度の正当性を持って課される選抜試験によって測定される「学力」に比べ、不透明とされている。

それに加えて、国境を越えて企業が優秀な人材獲得を目指す今日、英語に代表される外国語能力や、異文化と積極的に関与していく「コスモポリタンの視野・志向性」(Hannerz 1990)を含む「グローバル型能力」(額賀 2013)または、フランスの社会学者 Pierre Bourdieu の文化資本の概念をグローバルな領域に拡張した、「グローバル文化資本」(Igarashi and Saito 2014, Iijima 2009, Kim 2011, Weenink 2008, Weiss 2005)の重要性についても社会学の領域で議論されている。日本でも経済のグローバル化に即した人材について議論する、「産学人育成パートナーシップ・グローバル人材育成委員会」が2009年に設立されている。2010年に発表された報告書によると、「グローバル人材」に求められる能力として、1)「社会人基礎能力」に加え、2)外国語でのコミュニケーション能力、3)異文化理解・活用力であると定義されている。2012年に発足した第二次安倍内閣では「大学改革とグローバル人材育成」を優先課題に取り上げ日本の高等教育の国際化の取り組みを進め、文部科学省は2014年に「スーパーグローバル大学創設支援」を打ち出した。この支援事業は高等教育機関の「国際化」と「大学改革」を急速に推進し、世界中から優秀な研究者や学生を集めグローバル人材を育成することを目的とした活動を活発化させている。本稿ではこれらの「グローバル人材」に求められる能力を「グローバル型能力」として定義する。

これらの「グローバル人材」を育成しようとする動きは政府や大学を超えて教育市場においても広がりを見せている。近年、「グローバル型能力」を子どもに獲得させることを目的としたような保育園、幼稚園、学校が急速に増加している。通常の私立幼稚園の3-4倍の授業料で運営されている英語で育児を行うプリスクールが、2002年で全国に18校しか存在しなかったのだが、2009年ではその約17倍の312校にまで増えている(アルク 2009)。これらの教育実践は日本国内だけに留まらない。夏休みやそれ以上の長期に渡って母と子で英語圏の国や地域に渡り、子どもを現地のプリスクールや小学校に通わせる「親子留学」と呼ばれる留学ツアーが1990年から日本の大手旅行代理店によって催行されている。アルクが1990年から毎年発行する「子ども英語カタログ」という英語子育て雑誌は、1997年から海外親子留学が毎年特集するようになった。親子留学での人気の行き先の一つがアメリカのハワイである(ベネッセ 2006)。ハワイ親子留学を企画している旅行代理店によると、一週間から参加可能な親子留学に500から1,000組の日本人家族が毎年夏休みにハワイに渡航している(Igarashi and Yasumoto 2014)。ハワイにおいては、このような査証を取得しないで実践される親子留学が長期滞在(3ヶ月以上)に比べるとより散見されるという(Igarashi 2015)。

このような急速に変化する時代に子どもが獲得すべき能力の過多が子育てをする親一特に母親一の葛藤や不安を助長させているという議論がある。それは大正時期以降から広がった「教育する家族」イデオロギー、そして1950年代以降に浸透した「教育ママ」言説によ

る、「教育する母」としての規範に起因し、日本人母親の多くを子どもの学力達成だけでなく、人格形成も含めた教育的関心を持たせるよう社会的抑圧が日本人母親を「パーフェクトマザー」化させているという（広田 1999）。

しかしながら、このパーフェクトマザー化は、日本人母親全体ではなく、階層的背景や資源によって事なるという議論もある（本田 2004）。そして、本田（2008）は「ポスト近代型能力」などの、「個性」や「コミュニケーション能力」など、獲得手続きが不透明な能力言説の重要性が叫ばれるほど、子どもを育てる親、特に母親に対し、子育て不安を煽るのではないかと警鐘を鳴らしている。

それでは、「グローバル型能力」という新しい能力言説の普及が子どもの教育を行う「良い母親」としての自己肯定のパターンにどのように影響を与えるものであるのだろうか。本稿では親子留学で人気の行き先の一つであるハワイにて親子留学に参加している家族の事例を考察し、子どもの教育を主に担う親子留学の実践者でもある母親の語りに注目する。家族の教育戦略は、様々な言説やステレオタイプを用いながら日々実践されるため（Ball 2003）、どのように母親が子どもの能力言説を用いながら—「近代型能力」や「ポスト近代型能力」と「グローバル型能力」—自らを卓越化（Bourdieu 1979=1990）しているのか注目する。卓越化は行為者の肯定的な世界観構築の過程で行われるため、Michèle Lamont の「象徴的境界」1992, 2000）を方法論的枠組みとし、インタビューを通じた質的手法によって以下のリサーチ・クエスチョン（RQ）への回答を試みる。RQ：ハワイ親子留学へ参加する日本人の母親達は、どのような子どもの能力言説を用いながら自らを「良い母親」と自らを理解し卓越化を行っているのだろうか。

3. 方法論枠組み—Michèle Lamont の「象徴的境界」—

Michèle Lamont（1992）は象徴的境界を、各社会的行為者によって認知的に共有される、物、人、実践、時間や空間を分類する概念的な区別であると定義した。排除と包摂の基本構造である「我々」と「他者」の差異が、Pierre Bourdieu（1979=1990）の論じてきた文化の領域だけではなく、道徳的、社会経済的にも依拠し、アイデンティティの側面にまで浸透するものとして捉えた。社会の諸集団は、自らが存在する社会空間で経済、文化、社会関係資本を元に様々な言説を用いながら自己と他者を区別する主観的な 3 種類の象徴的境界—文化的、社会経済的、道徳的境界—を引くのである。Lamont（1992）は社会構成員が認知的境界線を引く行為である「バンドリーワーク」を以下のように詳述している。

自我を構築する過程における本質的な側面の一部がバンドリーワークである。境界は、我々が誰かを定義する際に現れたり我々の類似点や他者との違いに関して推測するときにかかれたりしながら、間接的に象徴システムを生成する際に現れる。私たちは自らの内面性や他者の特徴を定義し、アイデンティティはそれらとの関係性によって輪郭を形付けられる。卓越化を行うことによって、自らのアイデンティ

ティを示し、安心感、威厳、高潔さといった感覚を育むのである。私たちの日々の活動の中で重要な一部は、自らが属する集団の境界線を守りながら恥をかく事を回避し、肯定的なセルフ・アイデンティティを志向しているのである (p. 11, 翻訳は筆者)。

卓越化によって自らを肯定的に理解しようという志向性は、人間の内面に潜在する自我を守ろうとする心理的な力である。先行研究では、特定の諸集団は自分達にとって社会的脅威となる集団 (例えば、社会階層が上、同じ社会的資源を争う異なるエスニックグループの他者) に対して強くバンドリーワークを行う傾向を見出している (Lamont 2000, Lamont and Aksartova 2002, 額賀 2013, Stuber 2006)。このような境界は、紋切り型の表現や、様々な文化に根を下ろす言説、ステレオタイプ、物語を組み合わせることによって構築される。本稿では子どもの教育を主に担い、親子留学の実践者でもある母親の語りに注目する。そして親子留学参加者である彼女達がどのようにバンドリーワークを行い他者を位置付けながら「良い母親」としての世界観を構築しているのか分析し、子どもの能力言説を用いた卓越化の意味を考察する。

4. 調査方法と対象

本研究では 37 名のハワイ親子留学参加者である日本国籍を有する母親に対し、ハワイ州ホノルル市と東京で非構造化インタビューを 2008 年 3 月から 2011 年 2 月にかけて行った。親子留学参加者は旅行代理店を通してハワイに来るケースもあれば、個人でハワイの学校と連絡を取って渡航するケースもあり様々である。システムティックに調査対象者を抽出する手段がなかったことから、スノーボール・サンプリングを用いた。ハワイの親子留学を専門に斡旋している業者によると、多くの親子留学参加者が 1 週間や 2 週間の短い滞在であるが、本研究ではより親子留学という海外での教育実践に特に熱心な家族を対象とするため、3 週間以上ハワイに滞在している日本人の母親で夫も日本人という条件で調査対象者を探した。聞き取りは 45 分から 4 時間に及び、平均で約 75 分間行われた。聞き取りの場所は調査対象者に指定して貰い、多くはホノルル市ワイキキの喫茶店などで行われた。インタビューは日本語で行われ、全て書き起こしをした。尚、プライバシー保護のため、調査対象者の名前は全て仮名である。

インタビューは様々な制約から母親以外の親族の同伴を伴ったものから、録音を許されなかったものもある。また、子どもの教育よりも、現地に住む再婚相手に会いに来たり、子どもの障がいに対応する学校を探しに来たケースもあった。本研究では、37 名とのインタビューから、分析に耐えうる量の聞き取りが出来、渡航目的が子どもの教育のためということに疑いがなく、聞き取りの際に子どもが 12 歳以下の子どもがいた計 21 名のデータを用いる。

調査対象者の属性は、21 名のうち何らかの査証を有した長期滞在者は 5 名で、査証無しで滞在している短期滞在者は 16 名である。調査対象者は殆どが専業主婦であるが、夫の職

業は大企業や中小零細企業、自営業の社長であったり、医者、不動産経営、大企業ホワイトカラーであり、短期であれ長期であれ、日本とハワイに2つの世帯を同時に構えることが出来る、緩い概念で言う「富裕層」であった。調査対象者の学歴は、四大卒以上が10名、短大卒と専門学校卒が6名、高卒が5名である。また、短期滞在者のうち、8割以上が日本で子どもをインターナショナルスクール（以下、インター）、またはプリスクールに通わせている。将来どの小学校に通わせる予定かと尋ねると、プリスクール通学者の母親は、卒園後の学校選択に異なる希望を持っていたが、多くは日本の公立小学校に進学させるようであった。調査対象者の年齢は聞き取りを行った時点で32歳から49歳まで幅があった。

5. 分析

データ分析の結果、調査対象者は、主に「広い」・「狭い」という2つの紋切り型表現を用いながら、ハワイ親子留学やプリスクール、インターに子どもを通わせることによって子どもの能力が「広がる」と理解することで、他の母親たちを比較対象として自らを卓越化していた。この卓越化は、「グローバル型能力」言説と「ポスト近代型能力」言説に依拠したものだ（第5.1節にて詳述）。また、彼女達が「広い」世界観を持ちうることを可能にする「狭い他者」についても考察する（第5.2節）。母親たちが言及する「狭い他者」とは、「日本の高学歴エリート家庭」であり、特に低学歴層の母親は高学歴エリートに社会的脅威を感じ、バンドリワークを行いながら英語教育に注力する教育戦略を通して「良い母親」像を構築していた。「広い」・「狭い」を基にした調査対象者の世界観を表1にまとめた。

5. 1 「広い自分と子ども」—3つの領域における子どもの能力の広がり—

調査対象者は子どもの能力について多くを語った。彼女達は「広い」・「狭い」という二元的な表現を用い、子どもを英語浸りの環境に置く教育戦略を通して「良い母親」の世界観を構築しながら、自分の子どもが次の3つの領域における能力を獲得していると認識していた。1) 英語力、2) コスモポリタンの視野・志向性、3) 個性・自己表現力、である。1)、2)は「グローバル型能力」に該当するものであり、3)は「ポスト近代型能力」と合致する。以下、それぞれについての母親の語りを紹介する。

5. 1. 1. 英語力と広がる可能性

ハワイ親子留学やインター、プリスクールなどで教育することによって、子どもを小さいうちから英語を話す環境に馴染ませ、子どもの将来の可能性を広げると調査対象者は認識している。2人の男の子をインターの小学校に送る四年制大学卒の愛理香さんは、英語力を身につけることを以下のように理解している。

これからは英語が特技じゃなくて、必要最低条件かなと思いますね。なので、対等に話せるのが必要最低条件。それプラスもう一ヶ国語くらい喋れて、尚且つ日本語を完璧にしておかないと。欲張りなんですけど、やっぱりそうじゃないと、これから生きていくのに不都合だなと。可能性も狭まってしまうし。やりたいことが見つかったときに、これが出来ないわ、じゃ、ちょっと悲しいですしね。(2009年7月10日)

愛理香さんは英語力を子どもに身につけさせることを、これからの時代の「必要最低条件」と捉え、それが出来なければ子どもの可能性を「狭めてしまう」と感じている。つまり、英語力を身につけさせることは子どもの将来の可能性を「広げる」と理解されている。日本の公立小学校に一児の男の子を通わせる四年制大学卒の麻里さんは、英語力を身につけさせることで子どもの将来がどうなるか以下のように語った。

選択肢が増える。海外に行くような企業にも働けると思うし。うち税理士なので(子どもも)海外で税理士として働けると思うし。まあ漠然と親が求めても子どもがどうかは(分からないけれど)ね。(2009年7月24日)

麻里さんは子どもの将来の仕事について本人の意思を尊重しつつも、小さいうちから英語力をつけることで将来の「選択肢が増え」、国境に関係なく仕事が出来ると期待している。

一方、成績が良くなくても英語だけ出来れば将来は保障される、という語りも存在した。一児の女の子をインターの小学校に送る四年制大学卒である薫さんは言う。

基本的に、すごいうちの娘って勉強向かないみたい。成績表貰ってきたら、びっくりしちゃって。成績表見て、え？って。これが何段階の評価なの？からはじまって、どうもね、やる気が無いみたいなんです。ただのおバカになるなら、英語が喋れるおバかなほうがいいんじゃないかっていうのが、最終的なうちのパパとの結論。所詮バカだったらバカなりに英語が喋れたほうが就職口が広がるよね、っていうので……。 (2010年6月28日)

薫さんの家族は、英語力が学歴とは別の指標で労働市場で評価され、子どもの将来の「就職口が広がる」と認識している。

5. 1. 2. コスモポリタンの視野・志向性

調査対象者は、英語力の獲得以外にも、子どもがコスモポリタンの視野・志向性を獲得していると評価していた。3人の子どもの持ち一番下の小学生の娘とハワイに長期滞在してい

る四年制大学卒の美香さんは以下のように答えた。

筆者：英語にこだわる理由というのは何かありますか？

美香：うーん、日本だけの感覚でいてはいけないな、と……。一番は私が、サマースクールに子ども達をつれてくる中で、なんていうんだらう、私達にない、考え方がほかの国にあるんだってことをちょっとずつ知って行って、やっぱりこう、日本だけにいると、視野が狭いというか。(子どもは) いろんな考えを知った中で、自分がどうして行くかを決めればいいと。なんか、選択肢を広げなければというか、選択肢を広げてあげたいなと思います。

(2008年4月28日)

ここで美香さんが強調しているのは、国内だけに留まらず国外の考え方に目を向けるコスモポリタンの視野である。子どもに英語力を獲得させたり、海外の学校に子どもを送ることで子どもの視野が「広くなり」、「選択肢が広がる」と理解している。ハワイに長期滞在し、小学生の男の子とプリスクールに通う女の子を持つ最終学歴が高卒の瞳さんは以下のように語った。

ここ（ハワイ）はね、本当にラッキーなんですよ。カルチャーの坩堝じゃないけど。あの一、娘が行っている学校も、いろいろなカルチャーが入っているんですね。小さいころからカルチャーを学べるんですよ……。すごいカルチャー。これは宝ですよ。日本で育ったら、ほぼ日本人じゃないですか。だって、学校はほとんど日本人ですから……。でもここは、いろいろな文化を学べる。違う文化をリスペクトするっていうのをうちの子は知っていますから。お友達をリスペクトする、お友達を大切にする、お友達の文化は違う。とても重要なことを。(2008年5月20日)

瞳さんはアメリカの一部であるハワイと、日本の子どもが獲得できる視野・志向性が異なることを強調することで、日本で子育てを行っている家庭との卓越化を行っている。子どもが「カルチャーの坩堝」で文化の異なる人を「リスペクト」するコスモポリタンの志向性を学べる環境は「宝」であり、日本で育った子どもでは得ることが出来ないと認識している。

5. 1. 3. 個性・自己表現力

調査対象者は、ハワイ親子留学、インター、そしてプリスクールなどで子ども教育することによって獲得できる能力として、個性・自己表現力という、「ポスト近代型能力」の一部を挙げている。具体的には、自己主張、高いEQ、コミュニケーション能力、そして社交性を含む人との繋がりを構築するネットワーキング能力である。日本の公立小学校に2人の女の子を通わせる大学院卒の早苗さんは語る。

(うちの子は) 一対一だと喋れるんですけど、みんなの前で意見を言うのが嫌いなんですよ。でも、そういうのってスキルじゃないかなって。そういうのって自然に身につけていってくれたらな、と思うんですね。今回も一番下の子は結構図々しく質問するんですが、それはすごいことだ、いいことだ、日本人にはあんまりないって言ってすごく褒められたんですよ。そういう意味では下の子はほったらかしで育てているので……。まあ幼稚園を卒園したくらいで上の子はおりこうさんなんですよ。なのでやっぱりこう秘めたものがあるのか、もうちょっと自己主張していいよと先生は見てるそうで。でもそれは今の段階でもそうで、このまま日本にいとずっと大人になって、ますます質問とか出来なくなりそうじゃないかなあと。(2009年3月19日)

この発言の後、詰め込み教育の世界で生きてきた自分の生き方に疑問を感じている、と早苗さんは語った。自らが思うように自己表現・主張が出来ないという気持ちから、英語の教育環境を通して子どもに自己表現能力が身につくことを強く期待している。特に長女に関して、早苗さんは日本の学校で育つと自分のように意見を言うことができない自己表現・主張が苦手な大人になってしまうのではないかと心配している。

二人の男の子と女の子をインターの小学校に通わせる高卒の香織さんは、なぜ英語による教育環境に子どもを送りたかったのか以下のように言及している。

その理由は、自分が英語がネイティブではないから、こう、対等に話すというのが、やっぱり出来ないでしょ。それでこう、なんていうのかなー。なんか自己表現の仕方っていうのかな。英語を話すだけじゃなくて、自分の表現の仕方、表現できる、(教育)環境で育てたかった。(2009年7月15日)

香織さんも英語で行われる教育環境に子どもを送ることで、子どもには世界で対等に勝負できる英語力を期待し、子どもの自己表現力もつくと評価している。

調査対象者はハワイ親子留学や、日本でのプリスクール、インターに子どもを通わせることで、子どもが「広い」人間になり、「グローバル型能力」や「ポスト近代型能力」を獲得できるという世界観を共有している。新しく要求されるようになった2つの能力言説に依拠することにより、自らをそのような教育環境を提供している「良い母親」として卓越化する肯定的な評価を可能にしているのである。

5. 2. 「狭い他者」である日本の高学歴エリート家庭

親子留学参加者の母親達が共有する子どもの能力に関する「広い」世界観は、「狭い他者」との社会的な関係性から成り立っている。インタビューの中で「教育熱心な家庭」、「IQ の

高い家族」、「ほほ系」などと形容されたのが「狭い他者」である。これらが指し示すのは、私立小学校受験に熱心な「日本の高学歴家庭」とその子どもである。「近代型能力」に集約される基礎学力は高いが、コミュニケーション能力が低い子どもたち、と日本の高学歴エリート家族たちは否定的に解釈される。聞き取りの中で、誰が「狭い他者」を意識して語りを構築しているか分析したところ、四大卒以上の母親では10人中5人であったのに対し、6人中4人の短大・専門学校卒の母親と、5人中4人の高卒である母親が、「狭い他者」を意識した語りを構築していた。特に四大卒以下の低学歴層の母親達は、子どもの教育に関して既存の「良い母親」としての規範に沿っていないと感じるようで、肯定的な自己イメージを保持することの危機に晒されていると考えられる。彼女達がバンドリワークを行う際に使われる言説は、「EQ」や「人間性」などのポスト「近代型能力」言説や「グローバル型能力」言説であった。

第5.1.2節で語りを紹介した瞳さんは、ハワイの現地校で低い成績を取っている小学校低学年の息子について語る際、日本の高学歴エリートを他者化している。

体育が5で、それ以外全部2。少なくとも3くらいは取ってほしいんですけどね、でも重要なのは子どものやる気ですから。親がどうのこうの言ってもダメなんですよ。勉強が出来てもね、パーソナリティ、人間性なんですよ。いい大学出たって馬鹿なんていっぱいいるんですよ。いったら駄目だけど、いい大学出ている人こそが仕事は出来ないしね、人間性がないしね、経験もないしね、勉強しかしてないから。結局使い物にならない馬鹿が多い。これはね、ここだけの話、言っちゃいけない。でもね、本当に客観的に判断して、本当にそういうこと。親が行き届いていない。人間性を養わなきゃいけないのに、そこが出来ていなくて勉強勉強勉強だけ出来る。かといって仕事出来るかというところでもない。勉強しかしてないから、応用力がない。全てが全てじゃないですよ。出来る方はいるので。(2008年5月20日)

ここで瞳さんは「近代型能力」である伝統的に学校で評価される「勉強」に象徴される高い学力よりも、「人間性」や「パーソナリティ」という情緒的な側面が大卒の社会人に欠けているという物語を構築することで、「良い母親」である、という世界観を成り立たせている。

一方、瞳さんは実際に子どもに学歴が不要だと思っている訳ではない。

筆者：子どもの将来像についてなんですが、どのような高校、大学に行ってほしいですか？

瞳：本当はねえ、いい学校に、大学に行ってほしい(笑)。私は行ってないので。私は高卒なので。やっぱり無いものねだりというか。ちょっとね、まあ、みんなが、ああいい学校じゃないっていう名前がね。ブランドネームじゃない

ですけど。そういった学校に入れたらいいですけども私は高卒だし、主人は中卒だし、基本勉強は嫌いじゃないんだけど本当の意味で勉強がしたいかという、本当したくないですよ・・・。できれば、一般の人が一目置くような、じゃないけど、認めるような所には行ってもらいたい。

筆者：それは日本ですかアメリカですか？

瞳：うーん、私はあんまり詳しくないですけど、すごい有名なところだったら。
(笑) ハーバードとか・・・。(2008年5月20日)

一つ前の語りでは、勉強を熱心にする大卒層を否定した瞳さんであるが、ここではその高学歴層への羨望を隠さない。事実、瞳さんは日本にいた頃に長男の小学校受験に挑戦していた。しかし、彼女の茶髪やファッションが、他の高学歴層のママ達と明らかに違うことや、自らの文化的背景が「お受験ママ」とは全く異なることから諦めた経験を持っている。低学歴の瞳さんにとって、ハワイに子どもと一緒に渡りアメリカで教育を受けさせることは、最終的に「ハーバード」のようなブランドネームのある大学に送り、日本の高学歴家族をグローバル化の中で追い抜こうとする教育戦略であったのかもしれない。だが、インタビューが行われた時点では、彼女の期待する子どもの教育達成の目標と現地校での成績は既に大きく乖離していた。

瞳さんのようなバンドリワークを行う動機を、どのように理解すればよいのだろうか。先行研究では、象徴的境界は社会的脅威となる人間に対して引かれると議論されてきた。子育て中の低学歴である母親達は、海外で「グローバル型能力」を子どもに身につけようとさせても、日本の高学歴エリート家庭に対して強い社会的脅威を感じてるのかもしれない。そこで、危機に晒される「良い母親」としての自己イメージを維持するために、獲得不透明性が高く計量化の難しい「ポスト近代型能力言説」を使いながら高学歴エリートを他者化し、自らの子育てのあり方を肯定していると理解できるだろう。

一児の女の子を日本のプリスクールに通わせている専門学校卒の真理夏さんも、「お勉強好きな家庭」に対して、「ポスト近代型能力」言説を用いながらバンドリワークを行っている。

あんまり、お勉強お勉強、っていうのは私は性格的に。自分もあんまりお勉強を好きな方じゃなかったので。やっぱり、お勉強・・・、IQがいいのも、いいにこしたことはないのかもしれないのですけれども、やっぱり、私すごい最近思うのが IQよりも、なんだろう、EQの方が、心の知能指数っていうんですか。やっぱりそちらもすごく大事じゃないかって。いろんな悲しい事件がすごく起きているんで、それってなんでそうなるってしまうんだろって考えていったときに、やっぱり 小さい頃の親とのコミュニケーション不足だったり。あの何かやっぱり家庭の中での問題が、結果でなんでもあとからでるじゃないですか。(2009年3月18日)

真理夏さんは日本で近所のママ達に影響を受け、小学校受験の塾などに子どもを通わせて小学校受験準備をした経験があるが、精神的に追い詰められ途中で諦めた経験を持っていた。瞳さんのように教育する母の手腕が試される象徴であるお受験というメリトクラティックな競争から撤退する際に否定された、子どもの教育を担う「良い母親」の自己イメージを回復するために、「IQ がいい」「お勉強好きな」家族に対して「ポスト近代型能力」言説を用いてバンドリワークを行っている。ここで言及されている「悲しい事件」とは、2008年に起こった秋葉原の通り魔事件のことである。その犯人の母親が教育ママであると報道されていたことが、高いIQを持つように教育された子どもは犯罪を犯してしまうという世界観の根底を支えている。ハワイという美しい自然に囲まれた場所に滞在することで、英語力やコスモポリタンの視野・志向性だけでなく、EQに象徴される心の豊さが子どもに身につくと認識している。ここでも、「EQ」という「近代学能力」である学力と比べると測定が難しい能力を大事にして欲しいと考えることによって、高学歴家族を他者化し、自らを「良い母親」とイメージしている。つまり、「ポスト近代型能力」はメリトクラティックな競争から撤退する際に生まれる敗北感を「冷却」(Goffman 1952)させる言説として機能している。

6. 結語

本稿では、ハワイ親子留学に参加している日本人母親達が、どのような子どもの能力言説を用いながら自らを「良い母親」として理解しているのかについて考察を行った。この節では、子どもの能力言説を用いた卓越化の持つ意味を議論し結語とする。

ハワイの親子留学などに参加する日本人母親は、ポスト近代化やグローバル化の中で求められると理解されている「ポスト近代型能力」や「グローバル型能力」を子どもに獲得させ、「近代型能力」しか持っていないと認識されている高学歴エリート家族の子弟よりも良い子どもを育て自らを良い母親として認識する語りを構築し、自らを卓越化していた。しかしながら、ここでいう日本人母親が均一的な世界観を共有していたわけではない。特に、高学歴エリート家族の他者化をする傾向は、低学歴の母親間でより散見された。これは国内での「成功した」子育てをしていると考えられる高学歴エリート家族を社会的脅威としてみなし、そこで、危機に晒される「良い母親」としての自己イメージを維持するために、肯定的なセルフ・アイデンティティの志向の結果として理解できるかもしれない。

それではなぜ、調査対象者の母親達、特に低学歴層の母親は積極的に「グローバル型能力」、そして「ポスト近代型能力」を用いて積極的に評価して、高学歴エリート家族を他者化するのだろうか。それは高学歴エリート家族がこの2つの能力を持っていないと単に理解されているだけではない。むしろ、2つの新しい能力言説の中に「学力」の要素を排除して認知しているようである。

「ポスト近代型能力」は、学力と同一視される「近代型能力」とは異なり、正当に測定する手段が無い獲得不透明性を孕むため、個性が無いと理解される「IQだけが低いエリート」

と対比して自らの子どもは個性的であり人間性があるという世界観を構築することを容易にさせる。これは経済、文化、社会関係資本が低くても高くても、誰しものが依拠できる能力言説である。本田（2008）は「ポスト近代型能力」がその獲得の不透明性から母親の子育て不安が増えるのではと危惧しているが、調査対象者は、その獲得不透明な「ポスト近代型能力」をむしろ「武器」にして、自らの家族を高学歴エリート層から卓越化していた。瞳さんや真理夏さんの語りにみたような世界観の構築が、日本で子育てしている低学歴層でも似たように使われているのであれば、文部科学省が提唱をした新しい能力観である「生きる力」は階層再生産を拡大する留意すべき能力・教育言説として理解される必要がある。もし子どもだけでなく（荻谷 2001）低学歴層の親がより子どもの個性を武器にして子育ての自己効用感を得ていくのであれば、岩木（2004）がグローバル・メリトクラシーにおける「負け組」が、自分に与えられた生物的・生理的・心理的個性を武器にして表層的な個性に囚われていく、個性浪費社会に参入していくという危険性を指摘していた点と重なる。

また、同じように、「グローバル型能力」言説を使って自らを卓越化する資源を獲得することは、国内の小学校受験のような競争が激しい選抜試験がないインター、プリスクールや親子留学（短期・長期）のように、経済資本が高ければ容易に可能である。つまり、経済資本を子どもの英語・国際教育に投入すれば、英語を話すことのできないと認知されている高学歴エリート層を他者化して自らを卓越化することが出来るのである。だが、薫さんが学力がつかなくても英語だけ話すことができれば子どもの将来の仕事が確約されるという世界観を構築していたように、学力を伴わない「グローバル型能力」への認知的理解は一つの教育リスクを伴うものとして理解できるだろう。ここで留意しなければならないのは、文科省が掲げた「グローバル人材」には「社会人基礎能力」という、曖昧ではあるが、基礎学力のような「近代型能力」と合致するようなものを含んでいるにもかかわらず、調査対象者は「グローバル型能力」を語る時、学力の側面は国内エリート家族の保有する「近代型能力」として捉えられているということである。

以上の「グローバル型能力」言説や「ポスト近代型能力」言説を用いた高学歴エリート家族からの卓越化は Bourdieu が議論した「分類闘争」として理解出来るかもしれない。

紋入り型の表現と分類システムは異常のように諸集団の闘争の論点であり、諸集団を対立させながらそれぞれを特徴づけてゆくのだが、一方各集団のほうはこれらを自分の利益になるようにあやつりながら、これらをめぐってたがいに対立してゆく（Bourdieu 1979-1990 354）。

親子留学参加者の母親たちは、「広い」と「狭い」という紋切り型の表現を「ポスト近代型能力」そして「グローバル型能力」で表現しながら、自らの越境空間で行われる教育戦略を意味のあるものとして理解し価値付けをしていると考えられる。その中で階層の低い母親たちはこれらの新しい能力言説を積極的に用いて高学歴エリート家族の正統的な社会的地

位を否定し、自らの利益をもたらすような世界観を構築していると理解できるかもしれない。

本稿で議論したことは、ハワイ親子留学した母親の子どもの能力言説を用いた卓越化のパターンであり、この越境教育戦略の実際に子どもの教育的効果を考察したものではない。よって、この親子留学を経験した子どもたちがどのようなライフコースを辿り、教育達成を国内、そして海外で成し遂げるかについての研究が今後求められる。また、このような研究の積み上げが東アジアの越境教育・家族戦略との比較研究に貢献することになるであろう。

表 1：調査対象者の世界観

能力の領域	調査対象者の子ども＝広い	「高学歴エリート」の子ども＝狭い
1. 英語力	日本国外でも仕事を得ることができる	国内でしか仕事を得ることができない
	留学の選択肢も広がる	教育の選択肢が日本に限られる
2. コスモポリタンの視野・志向性	国境を越えて想像する力	国内だけの想像力
	異文化の人に対して寛容	異文化の人に対して不寛容
3. 個性・自己表現力	EQが高い	IQが高い→人と話し慣れていない
	自分の意見を言える	自分の意見を言えない
	自分を表現できる	自分を表現できない

<引用文献>

- アルク. 2009. 『子ども英語カタログ 2010』 アルク.
- Ball, Stephen J. 2003. *Class Strategies and the Education Market: The Middle-Classes and Social Advantage*, RoutledgeFalmer.
- Beck, Ulrich and Natan Sznaider. 2006. "Unpacking Cosmopolitanism for the Social Sciences: A Research Agenda." *British Journal of Sociology* 57(1):1-23.
- ベネッセ. 2006. オンライン投票-親子留学するとしたらどこの国?
URL: http://benesse.jp/vote/voteBackCommentList_3151_4.html
- Bourdieu, Pierre. 1979, *La distinction: Critique Sociale du Judgement*, Minut. (=1990, 石井洋二朗訳, 『ディスタンスシオン』 I, II 藤原書店)
- Chee, Maria W.L, 2002, "Migrating for the Children: Taiwanese American Women in Transnational Families," N. Piper and M. Roces ed., *Wife or Worker?: Asian Women and Migration*, Rowman & Littlefield Publishers, pp. 137-156.
- Finch, John and Seung-kyung Kim. 2012. "Kirogi Families in the US: Transnational Migration and Education." *Journal of Ethnic and Migration Studies* 38(3):485-506.
- Goffman, Erving. 1952. "On Cooling the Mark Out: Some Aspects of Adaptation to Failure." *Psychiatry: Journal of Interpersonal Relations* 15(4):451-463.
- 広田照幸. 1999. 『日本人のしつけは衰退したか』 講談社現代新書.
- 本田由紀. 2004. 「非教育ママたちの所在」『女性の就業と親子関係: 母親たちの階層戦略』 pp.167-184 勁草書房.
- . 2005. 『多元化する「能力」と日本社会—ハイパー・メリトクラシー化の中で—』 NTT出版.
- . 2008. 『「家庭教育」の隘路: 子育てに脅迫される母親たち』 勁草書房.
- Hannerz, Ulf, 1990, "Cosmopolitans and Locals in World Culture," *Theory, Culture & Society* 7:237-251.
- Igarashi, Hiroki. 2015. "Privileged Japanese Transnational Families in Hawaii as Lifestyle Migrants." *Global Networks* 15(1):99-117.
- Igarashi, Hiroki and Hiro Saito. 2014. "Cosmopolitanism as Cultural Capital: Exploring the Intersection of Globalization, Education and Stratification." *Cultural Sociology* 8(3):222-239.
- Igarashi, Hiroki and Saori Yasumoto. 2014. "The Transnational Negotiation of Motherhood, Wifeness and Selfhood: The Subjectivities of Japanese Women through Oyako-Ryūgaku in Hawaii." *Asian and Pacific Migration Journal* 23(4):451-474.
- Iijima, Remi, 2009. *Becoming Cultural Mediators: Global Cultural Capital of International School Alumni in Tokyo*, Sociology, University of Hawaii at Manoa, Honolulu, Hawaii (MA Thesis).
- 岩木秀夫. 2004. 『ゆとり教育から個性浪費社会へ』 ちくま新書.
- 荻谷剛彦. 2001. 『階層化日本と教育危機—不平等再生産から意欲格差社会(インセンティブディバイド)へ』 有信堂高文社.
- 吉川徹. 2009. 『学歴分断社会』 ちくま新書.

- Kim, Jongyoung. 2011. "Aspiration for Global Cultural Capital in the Stratified Realm of Higher Education: Why Do Korean Students Go to Us Graduate Schools?". *British Journal of Sociology of Education* 32(1):109-126.
- Lamont, Michèle. 1992. *Money, Morals and Manners: The Culture of the French and American Upper-Middle Class*, The University of Chicago Press.
- . 2000. *The Dignity of Working Men: Morality and the Boundaries of Race, Class, and Immigration*, Harvard University Press.
- Lamont, Michèle and Sada Aksartova. 2002. "Ordinary Cosmopolitanisms: Strategies for Bridging Racial Boundaries among Working-Class Men." *Theory, Culture and Society* 19(4):1-25.
- Lee, Yean-Ju, and Hagen Koo, 2006, "'Wild Geese Fathers' and a Globalized Family Strategy for Education in Korea," *International Development of Planning Review* 28:533-553.
- 額賀美紗子. 2013. 『越境する日本人家族と教育—「グローバル型能力」育成の葛藤』 勁草書房.
- Stuber, Jenny M, 2006, "Talk of Class: Discursive Repertoires of White Working-and Upper-Middle-Class College Students," *Journal of Contemporary Ethnography* 34(3):285-318.
- Waters, Johanna L, 2006, "Geographies of Cultural Capital: Education, International Migration and Family Strategies between Hong Kong and Canada," *Transactions of the Institute of British Geographers*, 31:179-192.
- Weenink, Don. 2008. "Cosmopolitanism as a Form of Capital: Parents Preparing their Children for a Globalizing World," *Sociology* 42(6):1089-1106.
- Weiss, Anja. 2005. "The Transnationalization of Social Inequality: Conceptualizing Social Positions on a World Scale," *Current Sociology* 53:707-728.